# 資料館だより

企画・編集　国立ハンセン病資料館
発　　行　公益財団法人
日本科学技術振興財団

〒189-0002 東京都東村山市青葉町4-1-13
電話　042-396-2909
FAX　042-396-2981
URL　http://www.hansen-dis.jp

## 神・谷両氏の悲願引き継ぎ 職員定員削減問題で合意書

国立ハンセン病療養所は政府がすすめている合理化政策により、平成18年度から職員の定数削減が続いており、各療養所は人手不足により医療、看護、介護の機能が著しく低下していると、全国ハンセン病療養所入所者協議会（全療協）は、平成21年4月の第68回定期支部長会議で「職員定員削減阻止の取り組みと実態調査をする」ことを決定した。

以後毎年春の予算要求統一行動、秋の予算獲得統一行動の他、施設長協議会、ハンセン病対策議員懇談会、ハンセン病問題の最終解決をすすめる国会議員懇談会、両議懇合同総会ハンセン病療養所所在市町連絡協議会、その他関係機関への要請活動を継続してきた。

しかし、事態が一向に進展しないため、平成24年7月の臨時支部長会議で「定員削減の閣議決定からハンセン病療養所を除外すること、賃金職員を定員化すること」と、「場合によってはハンスト、坐り込みを行う」ことを正式に決定、各支部は態勢を整えた。

平成25年6月の「追悼の日」集会で、谷全原協会長、神全療協会長は「閣議決定から除外の回答を安部総理から直接聞きたい。だめならハンストに入る」とし、さらに退職職員の再雇用、医師欠員補充、期間業務職員の待遇改善を強く求めた。

26年5月10日、11日草津町でのハンセン病市民学会開催時に、神会長、谷会長が相次いで亡くなり、関係者に多大なショックを与えた。

6月19日、両議懇総会で全原協の志村康新会長と全療協の佐川修会長代行が、両議懇の中曽根弘文会長、平沼赳夫会長に要請書を手渡した。同日、全療協は支部代表者会議を開催、神会長亡き後の本部機構の検討を行った。

合意書に署名する二人

7月10日、17時10分、総理官邸で統一交渉団は平沼議懇会長、厚労省関係者立会いで菅義偉官房長官と面談。佐川全療協会長代行が「ハンセン病療養所の実情を考慮し格段のご理解、ご高配を」と要請した。菅官房長官は、神さん、谷さんの死を悼むとともに「皆様が心おだやかに毎日過せるよう政府としても責任をもって取り組みます」と回答し、その後志村全原協会長が「心のこもったお話に感謝します」とお礼を述べた。

8月9日、全療協第76回臨時支部長会議開催。森和男氏（大島）を新会長に選出するとともに、非常勤中執、石川勝夫（松丘）、佐川修（多磨）、金城雅春（沖縄）の三氏を決定、常勤中執の選出には今後も努力することとなった。

8月15日、厚労省に統一交渉団、議懇関係者が集合。土屋品子厚生労働副大臣と森和男全療協会長による合意書の調印式が行われた。

### 合　意　書

厚生労働省は、平成27年度以降における国立ハンセン病療養所職員定員の取扱いについて、別紙のとおり取り組む。

一方、統一交渉団はこの内容を受け入れるとともに、全国ハンセン病療養所入所者協議会が、平成24年7月の臨時支部長会議において決議した「実力行使（ハンガーストライキ、坐り込み等）の断行」については、本合意書の締結日をもって取り下げる。

ハンセン病問題の残る課題については、実務的な協議の場等での協調的な話し合いを通じて解決の促進に努める。

上記合意の成立を証するため、本合意書を2通作成し、厚生労働副大臣及び統一交渉団代表が署名捺印の上、各1通を保有する。

平成26年8月15日

統一交渉団代表　森　和男
厚生労働副大臣　土屋品子

具体的な合意内容を記した別紙によると平成27年度から30年度までは毎年度の定員を＋1人とする。介護等の支援を必要とする入所者1人当りの介護員、看護師数を21年度に比べ約1.5倍にするとある。これで一応定員は確保されたが問題は欠員補充で、定員はあっても欠員が補充されなくては元も子もなく、今後の重要な課題だ。

8月29日、全療協は代表者会議を開催し実力行使取り下げを確認した。11時30分には統一交渉団、議懇代表が田村厚生労働大臣と面談し、定員問題合意について謝意を述べた。13時30分からは参議院議員会館で両議懇合同総会が開かれ、厚労省側より職員定員問題合意書締結までの報告が行われた。その後統一交渉団の各関係者より議懇への感謝の言葉が述べられ、参加者一同ホッとした思いであった。

# 20年以上療養所を撮りつづけた 趙根在写真展を開催

当館では、11月16日（日）から来年５月31日（日）まで企画展「この人たちに光を―写真家趙根在（チョウゴンジェ）が伝えた入所者の姿」を開催する。

趙根在（日本名・村井金一（むらいかねいち））は１９３３（昭和８）年、愛知県で生まれた。生家は貧しく15歳で中学校を退学、家計を支えるため岐阜県内の亜炭鉱山に働きに出る。以後数年間、事故と隣り合わせの危険な炭鉱労働に従事したが、やがて「地底の暗闇」で迎える死の予感に耐えられなくなり、「地上へ、光への脱出願望」をつのらせていった。この時の辛く苦しい体験が、後にハンセン病療養所の入所者に対する深い共感へつながっていったのである。

１９５７（昭和32）年に上京し、映画プロダクションに所属して照明の仕事をしていた１９６１（昭和36）年、初めて多磨全生園を訪れた。そこで在日朝鮮人入所者に出会い、「ここの人はかつて私が地底で体験したような出口のない闇のなかに閉じ込められているのだ」と強い衝撃を受ける。そして、その闇から脱け出したいという入所者の切なる願いを、社会に伝えることこそ自分の使命だと確信し、これがきっかけとなって初めてカメラを手にした。以後20年以上にわたって全国の療養所10ヶ所に通い、入所者と寝食を共にしながら撮り続けた写真は２万点にも及んだ。

趙根在の写真は、体の不自由な夫にヤカンで水を飲ませる妻の姿や、感覚のない指の代わりに舌と唇で点字を読む視覚障碍者、亡くなった入所者の葬送、患者運動など、そこに生きる人々とその生き様を鮮明に写す。それらは入所者との強い信頼関係がなければ撮影できなかった場面の数々である。さらに火葬場、監禁室などを写し、それらが存在していた当時の療養所の特異性を伝える。

本展覧会では、これらの写真の中から81点を前期、後期に分けてご紹介する。

趙根在が写真を媒介にして、どうしても社会に伝えなければならないと考えた入所者の姿を、ぜひこの機会に皆さんも心に刻んでいただきたい。

※２０１５年２月17日（火）～２月28日（土）は展示替えのため休室。

【付帯事業】

講演会「趙根在の写真を語る」

大竹章さん（多磨全生園入所者）

日時：２０１４年11月29日（土）

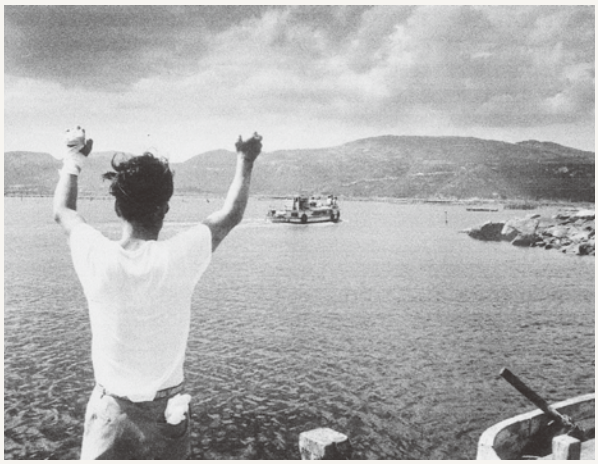
13：30～14：30

（開場　13：00）

場所：国立ハンセン病資料館

１階映像ホール

※入場無料。定員１５０人（当日先着順。事前申込不要）



島での別れ（長島）

病棟を訪ねて（多磨）

# 東京都公文書館と資料館が共催企画展を開催

10月30日（木）から12月12日（金）まで、東京都公文書館・国立ハンセン病資料館共催企画展「人権の歴史とアーカイブズ―ハンセン病、隔絶の歴史を超えて」が開催される。会場は東京都公文書館（東京都世田谷区玉川１－20－１）。

東京都公文書館は、歴史的資料として重要な価値を有する公文書等を、都民共通の財産として後代に伝えるため、これを保存し、利用に供する施設。同館所蔵の「東京府・東京市行政文書」は、国の重要文化財に指定されている。そのなかには、起廃病院、慰廃園、養育院、全生病院等、ハンセン病関連の記録資料も含まれている。

今回の企画展は、共催する両館の専門領域が重なり合う「東京におけるハンセン病の歴史」に焦点をあて、東京都公文書館が所蔵するハンセン病関係の記録資料を中心に、資料館等が所蔵するパネルや実物資料を加えて展示する。

東京都公文書館からは、養育院より後藤昌文への癩患者施療委託書類、養育院設立時の「救貧三策」、光田健輔への全生病院医長辞令等の資料が出展される。資料館からは、全生病院収容門や患者作業の写真、自助具、「なかよし」（全生園内小学校分校文集）等を出展する。このほか、「私立病院慰廃園設立願」等、好善社が所蔵する資料も出展される（いずれも予定）。

企画展のねらいは、ハンセン病の歴史を改めて振り返るとともに、人権問題を考えるうえで、記録資料が持つ意義を考える機会とすることにある。また、公文書館との共催企画展は初の試みであり、今後の館活動の新たな方向性を切り拓く事業となるかもしれない。

問合せ先は東京都公文書館史料編さん係（電話03－３７０７－２６０４）。開館時間は９時から17時まで。入場無料。会場は資料館ではないので、お間違えなく。

公文書館の資料

## 台風被害乗り越えたクリオン療養所

# フィリピン　国の「史跡」に指定

今年1月1日発行の本紙上で、昨秋台風30号により被災したフィリピン・クリオン島支援のため、寄付をお願いした。合計二〇〇ドルが集まり、全額クリオン療養所・総合病院に送金した。ご協力くださったみなさまに、この場を借りて深くお礼を申し上げる。この度、クリオン療養所・総合病院を訪問する機会を得たため、現地の様子を報告したい。

ところでフィリピンには、国家歴史委員会という国の機関があり、主に歴史上の人物に関する資料や史跡の保全を図るため、「歴史マーカー」と呼ばれる指定を行っている。この機関が、クリオン療養所・総合病院を「歴史マーカー」とすることを決めた。つまりフィリピンの歴史を語る上で、ハンセン病療養所は重要な場であると、国が認定したということだ。

この記念式典と、それに先立ち行われた国家歴史委員会のワークショップに、当館は招待を受けた。

まず7月24・25の両日、クリオン島対岸のコロンという町で開かれたワークショップに、オブザーバーとして参加した。このワークショップはフィリピンにおけるハンセン病に関する歴史・民俗・医療などを概括した報告書の編纂を目的としている。フィリピンの14人の研究者とイギリス・オーストラリアの2人のアドバイザーで組織されており、各人が担当するテーマについて報告を行い議論が交わされた。

続いて7月26日、クリオン療養所・総合病院の記念式典に出席した。式典は同病院の正面入口前で行われた。「歴史マーカー」であることを示すプレートの除幕と、クナナン院長や国家歴史委員会のディオクノ委員長らがスピーチをした。また昨年の台風被害から復興したクリオン博物館・文書館の再開館を記念する式典も、あわせてとり行われた。式典の中で、クリオン療養所・総合病院から当館に対して、クリオン博物館・文書館の建設に際して大きな示唆と、その後も協力を受けたとして、表彰していただいた。

クリオン博物館・文書館見学に集まった人々

式典の後、クリオン博物館・文書館を見学した。台風により屋根が剥がれ、窓ガラスが割れて、文書資料が雨に濡れてしまったそうだが、展示室も書庫も修復されて、被害を受ける前の姿を取り戻していた。当館からの寄付金は、この屋根の修繕と、雨に濡れた文書資料の保存処置に活用されたそうだ。

続いてクナナン院長に島内も案内していただいた。笹川記念保健協力財団がクリオン島全体の復興を支援しており、被害を受けた家は大方修復が済んでいた。病院の屋根など一部がまだ工事中だったが、人々の生活は大分元に戻っているようだった。

またクナナン院長からは、写真や映像の寄贈を受けた他、クリオン博物館・文書館と当館との協力関係を深めていきたいとのお話もいただいた。当館としても、同じハンセン病に関する博物館施設として、協力を進めて行きたい。

# 第36回夏期大学講座を終えて

## ハンセン病研究センター　森　修一

ハンセン病の総合的な学びの場として設けられた「ハンセン病医学夏期大学講座」（以下、夏期大学）は今年で第36回を迎えました。

今回の夏期大学は8月4日から8日に国立療養所多磨全生園を会場に開催され、医学生、看護学生、医師、看護師、薬剤師、行政官、研究者など40名が参加されました。初日は開校式が行われ、和やかな雰囲気で記念撮影、続いて平沢保治さんの「ハンセン病と人権」の講義に始まり、ハンセン病概論、歴史、臨床と講義が続き、午後には入所者・回復者の方々と受講生がグループ学習（交流会）で親交を深めました。二日目は末梢神経障害、国際協力を学び、午後にはハンセン病資料館を見学、ここで佐川修さんの講演をお聞きし、展示の見学をすると共に、園内の史跡見学を行いました。翌日からは医学・科学を中心としたコース（ハンセン病研究センター、牧野部長）、看護・福祉を中心としたコース（多磨全生園看護部、藤澤部長、木村副部長）で受講生は熱心に講義と実習に取り組みました。4日目の自由討論では朝戸裕園長（多磨全生園）から、ハンセン病の歴史に学ぶことは大きい。その歴史は偏見・差別や迫害に満ちたものであったが、昔の人々が特殊であったわけではなく、それは現代の私たちにも同じである事を忘れないで欲しい（概略）という内容のお話があり、とても大切な言葉だと思いました。翌日には閉校式が行われ、石井則久実行委員長を中心に活発な議論が行われたこと、夏期大学に名残を惜しむ受講生の姿などが印象的でした。

１９７７年の夏期大学開設時に比べ、日本のハンセン病患者は減少し、１９９６年には「らい予防法」が廃止され、２００１年には国家賠償判決があり、ハンセン病を取り巻く環境は急激な変化を見せています。受講生へのアンケートでも回復者・入所者の方々との交流会を重視する意見、ハンセン病の歴史から学び、ＨＩＶ感染症、精神病など今日の課題への対策に役立てる事、入所者・非入所者の社会課題への対応、ハンセン病に必要な高齢者ケアのあり方、国際協力などが今後の夏期大学への要望となっています。夏期大学は時代の流れの中で変化を求められており、私たちはそれに応えて行かなければなりません。

参加者で記念写真

# 一人芝居「ダミアン神父の生涯」上演

## ～多くの人から賞賛の声～

西田氏演じるダミアン神父

9月6日、一人芝居「ダミアン神父の生涯～ハンセン病患者と共に生き、死んだ司祭～」を当館映像ホールで上演した。

ダミアンは一八六四年、宣教師としてハワイに渡った。当時ハワイのハンセン病患者はモロカイ島に隔離されていた。

ダミアンはモロカイ島に移り住んでハンセン病患者を救済し、自らもハンセン病を発症して亡くなった聖人として知られている。

主演の西田正さんは一九四二年の生まれ。安保闘争とベトナム反戦運動で挫折を味わうものの、キリスト教に出会い、演劇を通じて人々に幸福を与えることが自分の使命だと役者を続けてきた。なかでも「ダミアン神父の生涯」は、15年間毎月公演を続けてきたライフワークとも言える演目である。

劇中西田さんは、ダミアンがハンセン病患者・司教・行政官それぞれとの関わりに悩み、怒り、自問自答しながらも、神への信仰を頼りに乗り越えていく姿を力強く演じた。

ダミアンの救済活動の過酷さと、ハンセン病患者に対する深い愛を感じさせるものだった。

２時間にわたる一人芝居を、約70人の来場者が鑑賞した。

アンケートには「西田氏のキリスト者としての思いを込めた演技に心打たれました。ダミアン神父そのもののようでした。」「私の信仰のあり方を問われた一日となりました。」など、演技への賞賛や信仰に関する感想が多くよせられた。ダミアン神父を初めて知った人も多く、ハンセン病の社会啓発としても有意義だった。

なお西田さんによるこの一人芝居は、毎月最終月曜日19時から、中板橋新生館スタジオで上演されている。見逃した方には、ぜひ一度ご覧いただきたい。

# 「敬老の日記念式典」開催

## 二〇三人の長寿を祝う

9月11日（木）午後1時30分より、多磨全生園コミュニティセンターで70歳以上の入所者の長寿を祝う「敬老の日記念式典」が開催された。式典の栞によると、9月3日現在、多磨全生園では対象者は二〇三人で、全入所者数の9割を超える。うち米寿12人、喜寿4人、長寿（89歳以上）は64人。

当日は荒天の予報だったが、開始前と閉会後、参加者が入退場する時間には薄日も差し、大勢の入園者、関係者が集まった。まず第1部の記念式が朝戸裕園長、佐川修自治会長の挨拶ではじまり、渡部尚東村山市長の祝辞、来賓紹介ののち、米寿の方々に記念品（赤いチャンチャンコと頭巾、レイ）が贈呈され、あおば保育園児からは一人ひとりに花束が手渡された。喜寿、長寿の方々にもそれぞれ記念品が贈られ、藤澤千栄美看護部長の乾杯の音頭でお茶やジュースが振る舞われた。

続く第2部では花さき保育園児による歌と踊りが披露された。聴衆はリズムに合わせて手を叩き、笑みを浮かべていた。その後子どもたちは場内を廻り、入所者のみなさんと握手やハイタッチをして楽しんでいた。手足の後遺症などが重い人も、スタッフに支えられて園児との交流を楽しんでおり、入園者と子どもたち双方にとって大切な時となったようだ。

# 邑久光明園入所者自治会で

## 文書資料調査

5月20日(火)から28日（水）および8月20日（水）から25日（月）の2度にわたり、学芸課の西浦と大髙が邑久光明園に出張し、同園入所者自治会所蔵の文書資料調査を行った。

同自治会の建物は2階に資料室があり、そこに自治会活動の記録資料となる大量の文書が保管されている。ここでは、文書を作成・取得した自治会内の部署ごとに排架されている。

調査の方法は、簿冊単位の目録を作成したうえで、文書一点ずつを中性紙封筒に封入し、その封筒を中性紙の文書箱に納める形をとっている。2度の調査で六〇〇点あまりの文書の調査を終えたが、道のりは遠い。

出張中の8月20日には、ボランティア活動のために光明園を訪れていた「ぼらばん」（神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センターによるボランティア創成プログラム）開催の懇親会に自治会長を通して招かれ、メンバーらとの交流を行った。

調査資料を記録する